

近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に(Ⅱ)

その2 修身について

橋口英俊* 三角 同** 鮎川成子** 今井啓子***

(昭和53年9月30日受理)

The Content Analysis of Human-Esteem and Achievement Motive in the Modern Textbook (Ⅱ) The Moral Textbook

Hidetoshi HASHIGUCHI, Hitoshi MISUMI, Shigeko AYUKAWA, Keiko IMAI

(Received September 30, 1978)

はじめに

この世に生をうけた以上、皆幸わせに生きたいと願う。それを援助していく過程が教育である。近代学校教育制度も究極においてはその流れに位置するはずである。その根本は愛であり、それを支えるのが、自他の人格・生命とともに尊重するという、いわゆる人間尊重、生命尊重の精神である。それは、人が人間として生きる原点であり、時代社会を越えて存在する普遍的原理でもある。しかるに、現実の社会に目を転じると、歴史的にも現在のにも必ずしもそうなっていないどころか裏切られることもしばしばである。その歪みを正すのも一に教育であるが、そのへんに関する基礎的研究が欠如していることも事実である。従来から教育学はともすると方法論に弱点をもち、心理学はとかく方法論に随す傾向があったが、本研究はその間をぬうべく、人間尊重、生命尊重という観点に一貫してたち、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成はいかにあるべきかを実証的に明らかにすることを究極の目標とする。すなわち、その一環としてわれわれは、まず明治5年の学制発布以降の初等教育における教科書を各教科ごとにとりあげ、各課を中心に、主として人間尊重と達成動機という観点から内容分析することにしたのである。その成果の一部はすでに公表しており¹⁾、なぜ明治にまで溯り、またなぜ初等教育における教科書を問題にしたかなどの理由についても、そこで明らかにしている。

ところで前回は、歴史的にも今日的にも特に心理的な面での影響が大きいと思われる国定I期以降の国語教科

書をまずとりあげ、分析したが、今回はより国の意志を反映していると思われる修身教科書を取りあげて検討することにした。なお、ここでは、人間尊重と達成動機を中心に分析するが、修身はその性格からいって、特にその時代社会のもつ価値観(人間観、教育観)を多面的に反映した教科であり、その内容に関してはより多層的の多次的な分析が必要となる。別稿で扱われる「よい日本人の分析²⁾」はそういう趣旨から行なったもので、本稿とは相補的な関係にある。また音楽および理科についても同様の分析を行なったが、紙幅の関係で別途考察することにした³⁾。今後の方向としてはひき続き、戦前の歴史教科書、戦後の各科検定教科書を順次とりあげ、これらの条件構造の分析がすみ次第、それらの教科書が実際に子どもたちにかなる影響を及ぼし、将来の行動や生き方をどう規定していったかなどについても可能な範囲で実証的に検討していく予定でいる。また、その成果をもとに、冒頭に述べた人間尊重、生命尊重という教育本来の目的を実現するための教材、ひいては教育とは一体何かを問いかけ、明らかにしていきたいと念じている。

方 法

1. 周知のように修身科は、第二次世界大戦後、連合国の管理政策により停止され(昭和20年12月)、従来の修身、公民、歴史、地理などの内容を融合して新たに設定された社会科に吸収されることになった(昭和22年3月)。したがって、ここで対象にする修身教科書も、必然的に学制発布以降第二次世界大戦までのものに限られてくる。

2. 国語の場合と同様、唐沢(1967)⁴⁾や海後(1969)⁵⁾を参考にして、明治5年の学制発布以降の修身教科書を

*臨床心理学研究室 **児童学科研究室 ***教材研究室

次のように分類する。

- (1) 翻訳教科書時代 (明治5~12年)
- (2) 儒教主義復活の教科書時代 (明治13~18年)
- (3) 検定教科書時代 (明治19~36年)
- (4) 国定Ⅰ期教科書時代 (明治37~42年)
- (5) 国定Ⅱ期教科書時代 (明治43~大正6年)
- (6) 国定Ⅲ期教科書時代 (大正7年~昭和7年)
- (7) 国定Ⅳ期教科書時代 (昭和8~15年)
- (8) 国定Ⅴ期教科書時代 (昭和16~20年)

3. 分析には「日本教科書大系 (近代編)」(全27巻, 講談社発行) の修身を使用する。

4. 国定Ⅰ期以前の翻訳教科書や儒教主義復活の教科書, 検定教科書については, 日本教科書大系に収録されているものの概要を検討するにとどめる。

5. 国定Ⅰ期以降の教科書については, 次の方法により検討する。

国定Ⅰ期からⅤ期までのすべての小学校教科書 (但しⅠ期からⅣ期までは尋常小学校, Ⅴ期は国民学校) を対象とする。具体的には, 各期・各巻・各課ごとに, その内容を中心として以下のような分析作業を行なう。

(1) 生命尊重についての評定, ここでいう生命尊重とは人間尊重とはほぼ同義で, 人間の尊厳という信念にもとづいて, 自他の人格・生命をともに尊重するという精神が内容的にどの程度もりこまれているかによって, 次の5段階に評定する。

L + 2 ; 生命尊重の精神が特に顕著に認められる。

L + 1 ; 生命尊重の精神が認められる。

L 0 ; いずれともいえない。

L - 1 ; 生命尊重に反する内容が認められる。

L - 2 ; 生命尊重に反する内容が特に顕著に認められる。

(2) 達成動機についての評定: その課の内容あるいは記述に, 達成動機なものがある程度含まれているかを次の3段階に評定する。ここでいう達成動機とは, 基本的に McClelland, D. C. らのいわゆる「困難なことをうまくなし遂げたい, 競争場面で人よりすぐれたい」というような何らかの価値的目標に対して, 自己の力を発揮し, 障害に打ち克ち, できるだけよく目標を達成しようとする動機」をさす⁹⁾。

A + 2 ; 達成動機が特に顕著に認められる。

A + 1 ; 達成動機が認められる。

A 0 ; 達成動機とは特に関係ない。

(3) 内容による分類: 先に筆者ら⁷⁾は, 各期ごとの比較や他の教科あるいは他の研究との比較が可能なように, 唐沢の分類を参考にして, 次にあげる10カテゴリーを設定した。ここでも, それにしたがって各期, 各学年の修身教科書を各課ごとに分類し, 分析する。なお, 分類に際して, Iは I₁ (学校以外のI) と I₂ (学校) に便宜上区別することにした。また重複を許し, 特定の内容にむりに分類することは避けた。

修身の内容に関しては, ほかに個人, 家庭, 社会, 国家, 総括の5領域について, 45の低位カテゴリーを設定して分析したが, これについては別稿で扱うことにする⁸⁾。

表 1

名 称	内 容
N (国家主義)	忠君愛国・国威発揚など国家主義的なもの
M (ミリタリズム)	軍事・戦争美化など軍国調のもの
E (教訓的内容)	道徳的教材・忠義・孝行など
S (季節・自然・年中行事)	自然の風物・地理・季節的行事など
I (生活・勤労・学校)	生活・勤労・学校・政治・法律・経済など
P (遊び・スポーツ)	レクリエーション・スポーツ・衛生も含む
H (歴史的内容)	歴史・伝記など
C (科学的内容)	物理・化学・生物など科学的内容のもの
T (文化的内容)	物語・劇・童話などの文学作品
(分類不明)	上記のいずれにも含まれないもの

註, 分類に際しては重複を許す。但しTは他の分類に含まれないものに限る。また修身の場合はすべて教訓的内容であるためEは省略する。

結果および考察

ここでは, 先に述べた趣旨にもとづき, 修身教科書について分析した結果を中心に考察する。

1. 国定教科書に至るまでの概観

明治5年の学制発布当時のわが国は, 文明開化の渦中にあり, 欧米先進国に追いつくための実利主義, 功利主義が支配していた。したがって, 修身科は当初より設置されはしたものの知育偏重の波のもとでは影が薄く, 最下位におかれていた。すなわち, 学制発布の翌月 (明治5年9月) に出された「小学教則」によると小学1, 2年で毎週2時間「修身口授 (ぎようぎのさとし)」が課されているが, これは教師が子どもたちに話をして聞かせるといった程度のものであった。また同時に文部省では5種の教師用参考書を指定したが, いずれも欧米の翻訳教科書である⁹⁾。その後いくつかの教科書や参考書が出されてはいるが, 「実際に使用されたのは相当進歩的な教育程度の高い一部の学校」に限られていたのではない

かと推定されている⁹⁾。しかしながら、当時の教科書は、上の例からもわかるとおり、各教科とも欧米文化をそのまま反映した翻訳教科書がほとんどであった。つまり、そこでは人間を自由で最高の生き物として描いており、それは必然的に国民をめざめさせ近代的な合理的批判的精神を生みやすくしており、体制側にとって国家統制という点で甚だ具合の悪い裏目の結果を招来したのである¹⁰⁾。

そこで明治13年12月に改正教育令が出されて一変する。つまり、最下位にあった修身が最上位におかれたのである。それは大正昭和を通じて変わらず、わが国の教育の一大特徴を形作ることになる。

最上位となった修身を中心に展開されたのは、まず伝統的な「孝」を中心とした儒教主義復活の教科書である。すなわち、明治13年4月には過渡的なものとして文部省より「小学修身訓」が出されている。それをみると、従来の欧米一辺倒から、東洋と欧米ものが相半ばするようになり、「論語」「孟子」など儒書の引用の多い教科書となっている。それが明治16年の「小学修身書」(文部省発行)になると欧米ものは一切姿を消し、儒教主義で一貫した教科書に変貌するのである。そしてそれはやがて、当時の自由民権運動を抑圧する意味もあって、さらに国家統制の強められた検定教科書に受け継がれていく。

明治19年4月の小学校令を契機としてわが国初の教科書検定制度が布かれ、同23年の教育勅語発布によってそれは強化の一途を辿るようになる。当初は Herbart 学派の影響もあって談話形式が採用され、修身書は教師口授資料であったが、明治24年の「小学校教則大綱」で改められ、25年以降数多くの検定修身教科書が作られた。これまでは「孝」に重点をおいた教科書が多かったが、検定期以降はそれとともに「忠」が強調され、日清戦争の影響もあり国家主義的色彩を濃くしたいわゆる「忠君愛国」型の教科書となっている。そしてついに明治37年を迎え、その後のわが国を長期に亘り支配する国定教科書時代に入るのである。

2. 国定教科書の分析

国定Ⅰ期からⅤ期までのすべての修身教科書について、課の内容を中心に、生命尊重(L)達成動機(A)という観点から分析し、さらに表1にしたがって内容分析した結果についても考察する。

(1) 全体的特徴

表2, 3, 4はそれぞれ生命尊重(L+), 非生命尊重(L

表2 各期学年別・生命尊重頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	%	
Ⅰ	L+2		0	1	1			2	81	2.5
	L+1		8	6	3			17	81	21.0
	計		8	7	4			19	81	23.5
	%		29.6	25.9	14.8					
Ⅱ	L+2	0	0	1	2	1	1	5	161	3.1
	L+1	6	3	6	4	5	1	25	161	15.5
	計	6	3	7	6	6	2	30	161	18.6
	%	24.0	11.5	25.9	22.2	21.4	7.1			
Ⅲ	L+2	0	0	2	2	1	3	8	159	5.0
	L+1	7	4	8	6	9	1	35	159	22.0
	計	7	4	10	8	10	4	43	159	27.0
	%	28.0	15.4	37.0	29.6	37.0	14.8			
Ⅳ	L+2	0	0	1	3	1	3	8	162	4.9
	L+1	5	3	10	6	7	1	32	162	0.2
	計	5	3	11	9	8	4	40	162	24.7
	%	18.5	11.1	40.7	33.3	29.6	14.8			
Ⅴ	L+2	0	1	0	3	1	1	6	120	5.0
	L+1	2	2	3	0	2	2	11	120	9.2
	計	2	3	3	3	3	3	17	120	14.2
	%	10.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0			

表3 各期学年別・非生命尊重頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	%	
Ⅰ	L-2		2	0	0			2	81	2.5
	L-1		2	4	8			14	81	17.3
	計		4	4	8			16	81	19.8
	%		14.8	14.8	29.6					
Ⅱ	L-2	1	1	0	2	2	4	10	161	6.2
	L-1	1	0	2	8	4	2	17	161	10.6
	計	2	1	2	10	6	6	28	161	16.8
	%	8.0	3.8	7.4	41.7	21.4	21.4			
Ⅲ	L-2	1	1	0	2	2	4	10	159	6.3
	L-1	1	0	3	5	3	4	16	159	10.1
	計	2	1	3	7	5	8	26	159	16.4
	%	8.0	3.8	11.1	25.9	18.5	29.6			
Ⅳ	L-2	1	1	1	3	1	5	12	162	7.4
	L-1	1	1	2	4	5	3	16	162	10.0
	計	2	2	3	7	6	8	28	162	17.3
	%	7.4	7.4	11.1	25.9	22.2	29.6			
Ⅴ	L-2	0	1	3	4	7	6	21	120	17.5
	L-1	1	5	3	4	2	6	21	120	17.5
	計	1	6	8	8	9	12	42	120	35.0
	%	5.0	30.0	30.0	40.0	45.0	60.0			

一), 達成動機(A)について、各期学年ごとの頻度および比率を示したものである。また表5はL+, L-, Aをそれぞれ得点化し、それを得点比に換算したものである。なお得点は、たとえばL+得点の場合、L+1, L+2をそれぞれ1, 2点として合計したもので、他の場

表4 各期学年別・達成動機頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	%	
I	A+2		1	7	2			10	81	12.3
	A+1		3	7	13			23	81	28.4
	計		4	14	15	27		33	81	40.7
	%		14.8	51.9	55.6					
II	A+2	1	6	4	9	6	15	41	161	25.5
	A+1	1	5	12	11	12	8	49	161	30.4
	計	2	11	16	20	18	23	90	161	55.9
	%	8.0	42.3	59.3	74.1	64.3	82.1			
III	A+2	2	1	5	12	15	13	48	159	30.2
	A+1	3	8	15	9	7	7	49	159	30.8
	計	5	9	20	21	22	20	97	159	61.0
	%	20.0	34.6	74.1	77.8	81.5	74.1			
IV	A+2	1	3	6	15	17	14	56	162	34.6
	A+1	2	11	14	5	9	6	47	162	29.0
	計	3	14	20	20	26	20	103	162	63.6
	%	11.1	51.9	74.1	74.1	96.3	74.1			
V	A+2	1	4	7	12	16	16	56	120	46.7
	A+1	1	9	7	2	2	0	21	120	17.5
	計	2	13	14	14	18	16	77	120	64.2
	%	10.0	65.0	70.0	70.0	90.0	80.0			

表5 各期別得点比(得点/課数×100)

期	I	II	III	IV	V	計
L+	25.9	21.7	32.1	29.6	19.2	0.3
L-	24.7	23.0	22.6	24.7	52.5	28.7
A	53.1	81.4	89.5	98.1	110.8	89.6

合も同様である。また得点比は、3者の関係を明確にする目的で上の得点を各期の課数で割り100を掛けたものである。それをグラフ化したのが図1である。

これらを見てわかることは、まず、各期を通じてA(達成動機)が極端に高いこと、特にI期からII期にかけて急上昇し、V期で頂点に達していることである。一般に明治以来の教育が富国強兵と立身出世¹⁰⁾にあったことはよく知られているが、それを今日的に言えば、達成動機つまり「困難なことをうまくなし遂げたい、競争場面で人よりすぐれたい、ある価値的目標に対して自己の力を発揮し、障害に打ち克ち、できるだけよく達成したい」という意味の教育が行なわれていたことを示唆している。これは他教科にも共通してみられる特徴であるが、とりわけ修身の場合に高く、たとえば国語と比較すると全期の平均得点比で国語25.6に対し、修身89.6と3.7倍にもなっている¹¹⁾。いかにこのへんが強調されていたかわかるであろう。これらのことを念頭に置きながら他へ目を転じると、きわめて興味深い結果をそこにみることができる。すなわち、L+(生命尊重)ではI期からII期

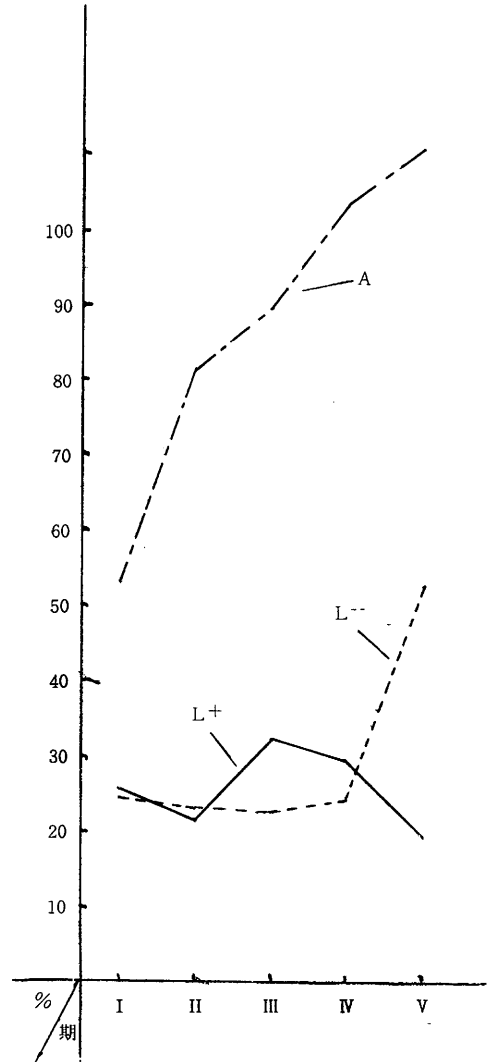


図1

にかけてやや下降していたのが、III期のいわゆる大正デモクラシー期になるといきなり上昇して、全期を通じての最高となり、その後はまた下降して軍国主義、国家主義の頂点であるV期には最低となっている。これに対してL-(非生命尊重)では、I期からIV期まではほぼ平行していたのがV期に至り急上昇して断然トップになっている。

ところで、これらの3つの指標を全体として眺めた場合、やはり目だって特徴的なのがこのV期である。いわゆる戦争突入期であり、超国家主義、軍国主義強化の時期であるが、子どもの教育にもそれが極端な形で反映しているように思われる。すなわち、非生命尊重と達成動機

が全期を通じてそれぞれ最高となり、逆に生命尊重は最低となっている。なお、ここでいう非生命尊重は主として戦争肯定と死を美化し、国のため、天皇のために命を捧げるということである。いいかえれば、ある意味でここにおける教育とは、こうした非生命尊重という価値目標の実現のために、子ども1人1人を最高度に動機づけるためのものであったともいえる。いろいろ考えさせられることの多い結果である。また、このV期と対称的なのがIII期である。達成動機は高いが非生命尊重は最低で、代って生命尊重が最高となっている。第一次大戦後の自由と平和が一時的に回復したいわゆる大正デモクラシー期であり、その空気がある程度ここにも反映しているように思われる。

表6 生命尊重(L+)の χ^2 検定結果

期	I	II	III	IV	V
I					↓
II			↑		
III					↓↓↓
IV					↓↓
V					

表7 非生命尊重(L-)の χ^2 検定結果

期	I	II	III	IV	V
I					↑↑
II					↑↑↑
III					↑↑↑
IV					↑↑↑
V					

表8 達成動機(A)の χ^2 検定結果

期	I	II	III	IV	V
I		↑↑	↑↑↑	↑↑↑	↑↑↑
II					
III					
IV					
V					

ところで、ここで注意すべきことは、国語や音楽に比べてL-とL+の点のはるかに少ないということである¹²⁾。すなわち、国語で修身と同じく国定V期までの曲線を比較すると、III期ではやはり他の時期に比べて相対的にL-が下がるが、L+よりはるかに高いところに位置している。音楽の場合も同様である。国の意志をもっと強く反映していると思われる教科書であるだけに一見

奇異に感じるかもしれないがそれは次の事情による。つまり、ある意味では本研究の限界ともいえるが、ここにおける分析単位は原則として課である。ところが修身ではいくつかの課が集まって1つの物語を構成したり、本当にいいたいことのプロセスが徳目として独立して課を構成し、本音は最後の1課という場合もしばしばある。たとえば主人公は同じで「身体をきたえる」という課の次が「きょうだい仲良く」で次が「国のために命を捧げる」というような場合である。前2者はL+であり、最後はL-と評価されるが、なぜ体をきたえ、きょうだい仲良くするのかといえば、国のために命を捧げるためであるということになる。そのニュアンスが生かせないところに方法上の大きな問題があるが、そのへんの限界を補う意味もかねて行なったのが、「修身教科書にあらわれた理想的日本人像¹³⁾」の分析である。つまり修身教科書では原則として最後の課が「よい日本人」というような総括としての理想的な日本人像が描かれている。それを中心に本研究と同じように分析したものであるが、予期したようにL-が大幅に増えているのが大きな特徴になっている。なお、徳目について分析するのもそれなりの意味はあり、やはり人格形成上の大きな視点だと思われるのでここではあえてこのような方法をとったのである。

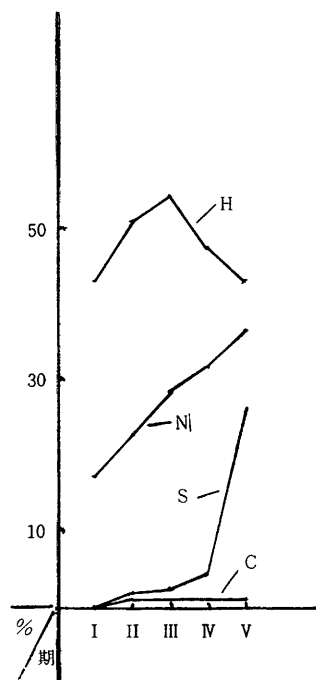


図2

次に内容面から全体を眺めてみよう。表9は、各期各学年ごとに課を単位として表1のカテゴリーにもとづいて内容分析した結果である。また図2, 3は各期各カテゴリーごとにそれを図示したものである。これをみてすぐわかることは、各期ともH(歴史)が高いということである。このHはほとんど歴史上の人物のエピソードである。つまり、その時代社会の進むべき道や人間のあり方をもっとも説得力のある歴史上の人物をモデルとして教え示そうとしていたことがうかがわれる。

またⅢ期以降、M(ミリタリズム)とN(ナショナルイズム)が上昇してくるが、大正デモクラシー期の特徴をよく示しており、やがてくるファシズム時代の足固めをしていたことがわかる。

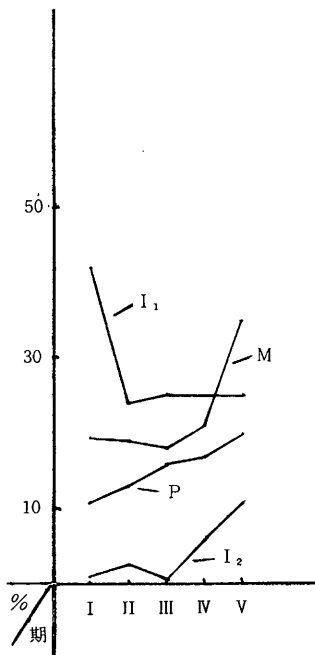


図3

(2) 各期ごとの特徴

それでは次に、図や表を参考にしながら各期ごとの特徴を概観してみよう。

1) 国定Ⅰ期(明治37~42年): 検定教科書から国定教科書に移行する際に最初に狙上へのせられたのが修身である。すなわち、明治25年に清水文二郎が帝国議会に提出した「小学修身教科用図書審査採定延期=関スル質問書」が契機となって、教育勅語の趣旨徹底をめぐる修身論議がはなばなしく展開され、29年には貴族院に馬屋原

彰らが「国費ヲ以テ小学校修身教科用図書編纂スルノ建議案」を提出した。その間外山正一の修身教科書無用論や福沢諭吉の国定化批判など多くの議論を生み、内外の関心をよんだ。しかし、日清戦争による国家主義の主張や折からの教科書検定をめぐる疑獄事件なども加担して議会を通過、同32年には安藤亀太郎らが衆議院に「小学校修身書=関スル建議案」を提出し、34年には修身だけでなく小学校教科書全体を国定とする建議が衆議院で成立したのである。こうした背景のもとに生れた教科書だけに他教科に比べてかなり慎重に審議され、明治33年の修身教科書委員会設置以来132回もの会合を重ねて編集し、完成までに3年の歳月を費やしている¹⁴⁾。それだけに興味ももたれるところであるが、図1をみると、A

表9 各期学年別内容頻度

内容 期 学年	N	M	S	I ₁	I ₂	P	H	C	
I	2	4	3	0	19	1	5	1	0
	3	4	5	0	3	0	3	19	0
	4	6	8	0	12	0	1	15	0
	計	14	16	0	34	1	9	35	0
II	%	17.3	19.8	0	42.0	1.2	11.1	43.2	0
	1	3	1	0	17	3	8	0	0
	2	3	2	0	11	0	4	10	0
	3	5	2	1	3	0	3	20	0
	4	9	8	1	5	0	5	16	0
	5	4	7	0	1	0	0	23	0
	6	13	11	0	2	1	1	13	1
計	37	31	2	39	4	21	82	1	
III	%	23.0	19.3	1.2	24.2	2.5	13.0	50.9	0.6
	1	2	1	0	16	5	6	1	0
	2	3	1	1	13	0	9	4	0
	3	4	4	1	1	0	2	24	0
	4	7	7	1	4	0	6	20	0
	5	9	5	0	3	0	2	22	1
	6	20	11	1	2	1	1	16	0
計	45	29	4	39	6	26	87	1	
IV	%	28.3	18.2	2.5	24.5	3.8	16.4	54.7	0.6
	1	3	2	2	13	7	7	0	0
	2	3	2	4	18	1	13	5	0
	3	8	3	0	5	0	1	11	0
	4	6	6	0	3	0	4	21	0
	5	13	6	0	0	0	2	24	1
	6	18	15	1	1	1	0	16	0
計	51	34	7	40	9	27	77	1	
V	%	31.5	21.0	4.3	24.7	5.6	16.7	47.5	0.6
	1	4	2	4	12	5	10	0	0
	2	7	4	11	7	5	8	3	1
	3	9	6	7	7	1	4	10	0
	4	15	9	6	2	0	2	11	0
	5	15	9	1	1	0	0	16	0
	6	14	12	2	1	2	0	12	0
計	64	42	31	30	13	24	52	1	
%	53.3	35.0	25.8	25.0	10.8	20.0	43.3	0.8	

が全期を通じ最低で、L+はやや高目になっている。また表9および図2、3をみるとN(ナショナリズム)とP(遊び)が各期と比較目だって低く、代ってI₁(生活)が群を抜いて高くなっている。つまり個人生活を重視し、その上での近代市民社会の倫理を説き、これまでの禁欲的自己抑制的な儒教的規範から市民的自主的道德がとりあげられているところに大きな特徴がある。Aは低いとはいっても得点比で50を越え、やはり立身出世、富国強兵の伝統は貫ぬかれている。ただ他期に比べ低いということで、特に当時は資本主義の興隆期にあっており、近代的職業倫理を説くなど(自立自営、勤勉、知識、男の務、女の務など)時代社会を敏感に先取りしている感さえうける。いいかえれば、徳目中心のお説教調、命令調の教科書ではあったが、相対的には近代的装いをもった進歩的内容の教科書であったということもできよう。また後にこのへんがもっとも批判されたところでもある。

2) 国定Ⅱ期(明治43年～大正6年)：Ⅰ期にみられた近代化が後退し、家族国家主義的色彩が濃厚となった時期である。Ⅰ期教科書は一方でHerbart主義者に忠孝本位の徳目主義に偏っていると非難され、他方では逆に日本主義の論者から忠孝道徳を軽視しているときびしい批判をうけた。しかし、上から与えられる形の近代市民社会の倫理が十分根づかないうちに日露戦争などを契機に勢いをえた国粹主義思想の影響などで、教科書は大幅な改訂を余儀なくされ、「忠君愛国」を基盤とする家族国家主義的教科書の誕生となる¹⁵⁾。それに関して唐沢¹⁶⁾は「このように“忠”という天皇への奉公も、“孝”という私的な親への奉仕も、共に一大家族という都合のよい論理の中に包んでしまっ、そこで一致させようとするのである。その限りにおいて、この家族国家観は、天皇制国家という支配体制を支えるイデオロギーとみることができる」と述べ、明治以後の教科書の歴史における第2の転換期として位置づけている。すなわち「第1の転換期はナショナリズムの教科書としての検定教科書の登場であったが、第2の転換期は帝国主義段階において登場した第Ⅱ期の教科書であり、まさに明治の総決算としての教科書の性格を示している¹⁷⁾」

さて、図1をみると、Aが急上昇をはじめ、学年で見ると高学年で特に高くなっている(表4)。またL+とL-はともにやや下がるが、両者を比べるとL-が若干高いのが特徴的である。これを内容面からみると、H(歴

史)とNの上昇が目立ち、I₁が急激に下ってくる。そしてこの傾向はほぼⅣ期まで保持されている。つまり、Mの軍国主義はⅠ期と変わらないが、天皇や国体に関する国家主義が大幅に増え、代って個人生活を中心とした市民社会の倫理に関する内容(Ⅰ期の目玉であったが)は激減する。その上で忠君愛国と孝を中心とした家族国家倫理が歴史上の人物を駆使して熱っぽく説かれることになる。達成動機の上昇は、これらの実現をめざし、とにかく刻苦勉励せよということで、しかも学年を追うごとに強化される。この基調は以後の日本(Ⅴ期までの)をある意味では方向づけており、その点画期的な教科書ということができよう。

3) 国定Ⅲ期(大正7年～昭和7年)：第1次世界大戦の影響で、各国の情勢にも著しい変化がおこり、わが国にも民主主義の風潮が高まってきた。そして多くの教育思想が次々と登場し、特に児童中心の新教育論が華やかに展開した時期である。Ⅱ期の教科書に対する批判は明治43年頃から一部で既にみられていたが、ここに至りにわかに噴き出し、Ⅲ期の改訂という形で実現したのである。図1をみてすぐわかることはL+が急に上昇し、L-がやや後退していることで、両者の差が全期を通じて最大になっている。6ケ年を通じ、第Ⅱ期の教科書と比較すると27課が削除され、27課が新たに加えられている。削除された大部分は国家主義、家族主義的忠君愛国的な内容の課であり、つけ加えられた課は逆に公民的、社会的、自主的なものであり、さらに国際協調についてもふれられており、近代的市民、公民としてのモラルを強く主張する内容のものとなっている。しかしながら、これを全体としてみた場合には表9や図2、3で明らかなようにN(ナショナリズム)は依然として上昇を続け、M(ミリタリズム)はやや下ったとはいえⅡ期あるいは次のⅣ期ともほとんど変わらない比率を保っている。Aの達成動機も相変わらず上昇を続け、H(歴史)は最高となっている。つまり一方で平和や民主主義が叫ばれ、特に生命尊重の急増などはたしかにそれを裏づけてはいるものの、他方次のⅣ期Ⅴ期もあわせて考えると、束の間の小休止という感はずえず、やがてくるファシズム時代へ向けての土台づくりの機能も同時に果していたことがうかがわれるのである。

4) 国定Ⅳ期(昭和8～15年)：いわゆるファシズム強化の時期である。大正デモクラシーの反動で政府の思想統制や国家主義教育の強調が積極性を帯びはじめ、治安

維持法の制定(大正14年)はその最たるものであった。特に満州事変(昭和6年)の勃発は, 超国家主義にもとづく臨戦体制を余儀なくし, 国家主義的の道徳教育が強く要求されるようになったのである。そこでできたのがⅣ期の教科書で, それについて唐沢¹⁰⁾は次のように述べている。「Ⅲ期において現われ始めた市民の倫理が, 再び臣民の倫理へと反転して行ったのであって, いわばⅡ期修身教科書における前近代性格がⅢ期の比較的近代的な修身教科書を媒介として, 新しく臣民の倫理として強化されたものといえよう。」

図1をみると, Aはさらに上昇を続け, 全期を通じて2位となり, それも表4をみれば明らかなように, 学年が進むにつれて一層強められてくることがわかる。L+はやや下降をみせ, 逆にL-は上昇し, 全期を通じⅠ期とともに2位になっている。なおL-が, L+に比べてそれほど目立たないのは先に全体的特徴のところを考察したことが大きく影響しているものと思われる。

次に内容に目を移すと図2, 3および表9からわかるとおり, Nはさらに増大し, またⅢ期まではほぼ平行して走っていたMのミリタリズムが一挙に2位に浮上してくる。I₁(生活)は相変わらず高い位置を占めるが, I₂(学校)やS(自然)が急激に増えてくるのも大きな特徴となっている。一時鳴りをひそめた国家主義, 戦争肯定の姿勢が強化され, 忠君愛国, 臣民の育成へ向っての全力疾走が修身科を中心に教育界を風靡しはじめた感が強い。内容的にも家庭や学校, 自然を題材としたものが増え説得力を増してきたような印象をうける。いずれにせよⅣ期へ向けての戦いに臨む姿勢を教科書の端々に感取することができる。

5) 国定Ⅴ期(昭和16~20年): いわゆる第二次世界大戦突入期であり, 超国家主義や軍国主義が強化宣伝され, 教科書によって皇国民の錬成が徹底的に行なわれた時期である。昭和12年12月に発足した教育審議会で, 小学校は国民学校に改められ, 初等科6年, 高等科2年の計8ヶ年の義務教育制が策定され, 昭和16年から実施されることになった。それと同時に, 教科目制も変わり, 修身が, 国民科の1科目として位置づけられた(国民科修身)。折からヨーロッパではすでに大戦がはじまり, わが国でも臨戦体制の強化が余儀なくされ, その中において特に国民科修身は, 皇国民思想を形成するために重要な任務を果さなければならなかった。つまりそういう背景のもとに誕生したのがⅤ期教科書である。したがって

修身教科書の場合も, 従来の教科書の修正ということではなく, まったく新しい戦時教材の構想のもとに編集されたのである¹⁰⁾。

それは全体的特徴のところでも述べたように, ここにかかげた図や表をみても歴然としており, 随所にその特徴をみることができる。

すなわち, 図1をみれば明らかなように, Aはさらに急勾配で上昇し, もちろん全期を通じ断然トップである。またこれまで比較のおだやかだったL-も, 突如急激に上昇し, やはりトップになる。そして逆にL+は激減し, 最低となる。両者(L-とL+)の距離が極端なまでに拡大するのも大きな特徴である。またこれらを学年別に見るとAとL-は, 学年が進むにつれて強化され, 教育目標とそれを実現する達成動機との関係を浮きぼりにしている。

さらに内容面でもきわめて特異な傾向を示している。

すなわち, M(ミリタリズム)は前述のL-と同じく, これまでそれほど大きな変化をみせなかったのが, ここに至り一挙にトップに, しかもかなりの急勾配で踊り出してくる。またN(ナショナルリズム)もこれまでの延長でさらに上昇を続け, これまた全期を通じてのトップである。これと同時に忘れてはならないのは, I₁, I₂の動きで, I₁は相変わらず高く, I₂はさらに増加してくる。またそれと関連して, P(遊び), S(自然)も上昇しているのが特徴的である。

いいかえれば, Ⅴ期教科書は, 超国家主義や軍国主義, 皇国意識や聖戦意識の強化徹底を中心にするにすぎていることはたしかであるが, 同時にそれを実現していく過程で, 現実の家庭や学校における生活を重視し, 自然や遊びの中にそれを学習させていこうとする配慮もそこによみとることができる。ある意味でそれは, 明治以来の教科書の総決算であり, 集大成でもある。それだけにこれらの結果は, 改めて教育とは何か, 子どもにとっての教育とはということを考えさせてくれる結果でもある。

要約と今後の課題

本研究の究極の目的は, 教科書の人格形成におよぼす影響をできるだけ明らかにすることにある。その一環として今回は, 国定Ⅰ期からⅤ期までの全小学校修身教科書を取りあげ, 生命尊重(L+), 非生命尊重(L-)および達成動機(A)を主な指標とし, それに他教科との比較もかねての10の内容カテゴリーを設定して内容分析し,

その結果について考察してきた。そこでわかったことは、

1) 各期を通じAが極端に高いこと、特にⅠ期からⅡ期にかけて急上昇し、Ⅴ期に頂点に達すること。

2) L+はそれほど大きな動きを示さないが、Ⅲ期で最高となりⅣ期からⅤ期にかけて急激に低下すること。

3) L-はⅣ期までほとんど変化をみせないがⅤ期に至り急激に上昇すること。

4) 内容ではH(歴史)が全般に高く、Ⅲ期以降に特にN(国家主義) M(軍国主義)が上昇し、Ⅴ期で頂点に達すること。

5) これを各期ごとにみると、各時代の特徴をきわめて敏感に反映しており、Ⅰ期の近代的市民社会の道徳からⅡ期の家族国家主義の道徳へ、さらにⅢ期の大正デモクラシー期の比較的自由に民主的な道徳が間に入ってⅣ期のファシズム時代の臣民の教育へ、そして最後にすべての総決算であり、集大成でもあるⅤ期の超国家主義と軍国主義にもとづく皇民錬成の教育でしめくられる。

以上であるが、前回報告した国語や音楽でもそうであったが、ある面ではそれ以上に時代社会のもつ価値観を敏感に先取りし、内容を大きく支配していることが確認できた。ちなみにA、L+、L-の得点比を国語の場合と比べるとおよそ2~3倍にもなっている。なお今後は引き続き明治以降の歴史および戦後の検定教科書や学習指導要領を同じ手続きにより分析検討する予定である。また実際にこの教科書を学んだ子どもがそれによっていかなる影響をうけ、のちの生き方や行動とどうつながっているかなどについても可能な限り実証的にとらえ、人間尊重、生命尊重という教育本来の目的を実現するための教育とは一体何かを考えていきたい。

本研究をすすめるにあたって、次の諸氏をはじめ多くの方々のご指導ご援助をいただいた。付記して厚くお礼を申し上げる次第である。(順不同)

沢田慶輔先生、堀内康人先生、跡見一子先生、川瀬八洲夫先生、落合聡三郎先生、神保信一先生、大西文行先生、鈴木敬司先生、大瀧ミドリ先生、大橋一憲先生、加部佐助先生、高田真弓氏、武石仁美氏、森沢優子氏

引用文献

- 1) 橋口英俊、三角 同、鮎川成子、今井啓子、浦部陽子：「教科書と人格形成に関する基礎的研究(Ⅰ)」その1~その4、第19回日本教育心理学会総会発表論

文集、p. 485~495 (1977)

橋口英俊、三角 同、鮎川成子、今井啓子、浦部陽子：「近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に、その1国語について」東京家政大学研究紀要 18 (1), p. 59~68 (1978)

- 2) 三角 同・橋口英俊・鮎川成子・今井啓子：「修身教科書にあらわれた理想的日本人像」東京家政大学研究紀要 19 (1), p. 51~60 (1979)
- 3) 今井啓子、橋口英俊、三角 同、鮎川成子：「近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に(Ⅲ)、その3理科について」東京家政大学研究紀要 19 (1), (1979)

鮎川成子、今井啓子、三角 同、橋口英俊：「近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に(Ⅳ)、その4音楽について」準備中

- 4) 唐沢富太郎：「教科書の歴史」創文社、東京(1956)
- 5) 海後宗臣、仲 新：「近代日本教科書総説」解説編、講談社、東京(1969)
- 6) McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A. & Lawell, E. L: *The Achievement Motive*. N. Y., Appleton Century (1953)
- 7) 橋口英俊ほか：前掲書、p. 61 (1978)
- 8) 5種の文部省指定翻訳修身教科書

「民家童蒙解」(青木輔清、5冊。1,2巻は古今先哲の嘉言訓話などを各種の倫理書から拾い出して初歩向きに書き下したもので、3巻以下は米国の倫理学者 Francis Wayland による小学生向き倫理啓蒙書「Wisdom」を抄訳したものである。1874年)

「童蒙教草」(福沢諭吉、5冊。英国の Robert Chamber の「Moral Class Book」を翻訳したものである。1872年)「修身論」(降部奉蔵、3冊。前述の Wayland の「Elements of Moral Science」を翻訳したものである。1872年)

「泰西勸善訓蒙」(箕作麟祥、15冊。前篇3冊はフランスの Bonne が1867年パリで刊行した児童向け法律書の翻訳で、後篇8冊は米国の Winslow の「Moral Philosophy」(1866)の抄訳、続篇4冊は米国の Heckoch の「System of Moral Science」中の国政論の1部を抄訳したのである。1871~1874年)

「性法略」(神田孟格。オランダのライデン大学に津田直道と西周が留学した際の講義録を翻訳したもので内容は法律論である。1863年)

- 以上, 唐沢 (1968), 海後ほか: 「日本教科書大系近代篇第1巻」(講談社, 1961)による.
- 9) 唐沢富太郎: 前掲書, p. 64 (1956)
- 10) 学制発布の精神は一方で富国強兵と立身出世にあるが, 同時に四民平等, 教育の機会均等, 個人主義がうたわれており, その影響もみのがせないである. 文部省「学制百年史」(ぎょうせい, 1972)
- 11) 橋口英俊ほか: 前掲書 (1977, 1978)
- 12) 同上
- 13) 三角 同ほか: 前掲書 (1979)
- 14) 海後宗臣, 仲 新編: 「日本教科書大系近代篇」, 第3巻 講談社, 東京, p. 616~622 (1962)
- 15) 同上 p. 628~632
- 16) 唐沢富太郎: 前掲書, p. 278 (1956)
- 17) 同上 p. 270
- 18) 同上 p. 436
- 19) 海後宗臣, 仲 新編: 前掲書, p. 643~649 (1962)
- 20) 本研究の1部は第20回日本教育心理学会 総会において発表した.